

地球防衛軍～駆け抜ける強風～

叢雲嫁な怪獣王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1954年、

ビキニ環礁で実施された水爆実験は一つの災害を呼び覚ました。

民間船舶を沈め、民家を踏み潰し、日本の首都東京を二度の上陸で蹂躪した。それはゴジラと呼ばれる怪獣の一体目だった。

そこからは人類と怪獣の生存競争が始まった。

それに対抗するべく、人類は一つの超兵器を開発した。『メーサー』の登場である。

それは幾度も侵攻する怪獣の撃退に寄与し、常に上陸された日本の国防の要となつた。

だが、それも通用しない相手が出現した。ゴジラの再来だった。80歳を超す怪獣にメーサーは進撃を完全に食い止めることはできず、再び首都が蹂躪されることとなった。

そこからは人類を脅かす怪獣の脅威は増すところとなった。キングギドラ、スペースゴジラ、デストロイア。時を経て何時しか戦いはギャオスを地球規模の脅威として、果てしない生存競争が続いていた。

そんな状況の中、ある地へと一人の青年が降り立つ。

※以前書いていた小説の再リメイク作品です。

目次

プロローグ	1
プロローグⅡ	8
第1話 着任	17
第2話 第6期生	28
第3話 超能力者	37

プロローグ

2009年 7月 東京

その日、首都の日常風景は惨状に変わった。

都内の至るところで火災が発生し、倒壊した建物から散乱した瓦礫とガラスが道路を埋めつくしている。道の脇には何かに押し潰された自動車もあり、住民が避難して廃墟同然になった場所もあった。

東京にこれ程の甚大な被害をもたらしたのは、一種の生命体だ。

『怪獣』

それは、通常の生物の枠を外れた超常的な存在。

半世紀以上も前、日本に上陸した最初の個体を始めとして、日本に数多く出現するようになった特殊生命体の総称。

この日、東京を惨状に変えたのも怪獣の一種だった。

『ギャオス』

14年前、あるいは5年前まで猛威を振るったゴジラとは異なる脅威。驚異的な繁殖力と環境適応力、異常な進化能力を持つ人類の天敵。

それが今日、日本に大挙して押し寄せたギャオスが東京を襲ったのだ。

その数、実に千頭以上。事前に察知した日米の海上防衛線を飛び越え、水際の対空砲火すら突破して都内を蹂躪し始めた。

上陸したギャオスの大群に対し、人類側は陸空のあらゆる戦力を動員して迎撃。予め数カ所設置された避難区域防衛のため市街地戦を展開した。

幸いにも、人類側が投入した新兵器の活躍もあり、戦線を建て直して撃退に成功。現在は事後処理のため、都内の至るところで被害状況やギャオスの死骸などを調査する段階に入っていた。これは東京を含め、日本では震災に遭ったときと大して変わらないくらいには、日本の国民には馴染み深いものになっている。

その上空を、二つの巨大な影が飛翔していた。

片や極彩色の昆虫を連想させる羽根と、鮮やかな体毛に包まれた胴体、大きく丸い青色の瞳が特徴的な巨大蛾。

片や全体的に黒い体色、赤と黄色で組み合わせた稲妻模様が浮かぶ羽根を揺らし、頭部には甲虫を連想させる角が幾つも生やしている。

そんな対照的と言える2羽の怪獣は、ある地点を中心に旋回していた。

東京都 特別二十三区 渋谷



『もう、戻れないの……………？』

掠れるような問い掛ける声が少年の耳に届いた。

『……………ああ。もう、戻れない』

問い掛けに少年は短く答え、視線は前方の集団に向けられていた。

荒廃した道路に並べたハンヴィー、その脇で銃を持った戦闘服姿の兵士達が先程からこちらに呼び掛けている。

『私、どこで間違えたの？ どうすれば君を救えたの？』

『……………』

少女の疑問に対し今度は沈黙で応えた。

別に少女の選択を責めるなど出来ないだろう。何故なら、いずれ訪れる破局が今来ただけなのだから。

『どこで間違えたとかじゃない。どのみち、こうなるだけだったんだ』

『っ、でも！』

少女は食い下がろうとするが、痺れを切らした兵士達が少年の確保に動いた。

『時間だ、そろそろ行くよ』

一方的に告げてから両手を上げて歩き始めた。後ろから呼び止めようとする叫び声
が耳に届くが、すぐに兵士の一人に取り押さえられて小さくなった。

『今まで “幸せ” をありがとう。さよなら』



四年後。 2013年 4月



懐かしい夢を見た。

俺がまだ子供だった頃のだ。まだ義務教育を受ける段階で、大人になった時の事なん

て考えても見なかった。

『BirdlよりGaleel。どうした？ バイタルが変化したが』

ヘルメットのスピーカーから電子的な音声が響く。聴けば男性とわかる太い声の主は、俺の上官で輸送機のパイロットを勤める人物だ。

「問題ありません。少し、懐かしい夢を見てました」

『帰還するまでが任務だからな。今回は目を瞑るが』

「寝てて良いと言ったのは少尉でしょう？」

『生意気言うな、と言いたいがその通りだから言い返せんな』

上官のいい加減な返答に思わず嘆息した。

俺の名前は、こうやましようち神山 勝一。東京で生まれ育ち、今年で19才になる点は他の同年代と

変わらないと思う。

俺が特殊な能力を持った少年兵だという、ひとつの点を除けば。

『まあ、帰投途中で寝落ちしても無理ないかもな。知ってるか？ アルビノ型を撃破したのは多分、お前さんの年齢では初めてなんだぜ？』

「作戦目標のギャオスに紛れてたから仕留めただけです」

『手柄を誉めてるのに可愛くねえのな』

「任務ですから」

そう言うのと無線越しに溜め息が伝わってくる。

『まあいい。もう少しすれば八王子基地だ。詳しいことは基地司令官殿に報告しよう』

Yes, sir
「了解」

上官向けの挨拶で応える。マイクをオフラインにして、懐から一枚の写真を取り出した。

「俺が Earth Defense Force
D F に入って、もう三年か」

懐かしむように呟く。

『EDF』

それは今俺が所属する軍事組織の名前だ。今から7年前に拡大する怪獣の脅威に対抗すべく設立された、超法規的な軍隊。

『地球防衛軍』

そう呼ばれる組織に俺は身を置いている。

写真には五人の男女が写っていた。

左にニコニコと笑顔を浮かべ、片方はまっすぐな視線でカメラを見つめる二人の女性。

右には厳つい顔つきの男性、その目の前で少年が困ったような顔をして、少女が腕を組んでいた。

「あの頃は、彼女のスキンシップに落ち着かない日々だったな」

過去の情景を思い浮かべたら、気付かぬうちに眩いていた。

だがそれも過去だ。それまで送っていた日常に終止符は打たれ、俺は彼女から離れた。

未練を振り払うように瞑目すると、俺は傍らに置いたヘルメットを被り密閉して左右の操縦桿を握った。

プロローグⅡ

EDF日本支部・東日本方面司令部・八王子基地

そこは日本に9ヶ所存在するEDF日本支部の基地の一つだ。元は特生自衛隊の拠点だったが、現在は怪獣対策の最前線であるEDF日本支部として機能している。

八王子市より西の丘陵地帯からそれは現れた。

それは大気を震わせる騒音からしてジェット機だが、単純に戦闘機のそれではない。シルエットこそF-15等の第4世代機に似ているが、大柄な胴体を見ると空戦向きなのかは微妙だった。

現れたのはそれだけではない。ジェット機はワイヤーで何かを吊るしていた。

地味だが所々傷の付いた全身をグレーに染めた装甲。神話や伝説上の龍を彷彿とさせる頭部と鋼鉄製の尻尾。

背中に戦闘機を連想させる主翼と双発のターボジェットエンジンの、右腕に砲身が二つ並んだ火器、左腕には丸い盾のような物体を着けている。

そんな二つの存在が各4機、4組で構成する集団が飛行していた。

やがて基地の敷地内にある格納庫前でロボットを吊るした輸送機が到達、上空で

ホバリングしながら徐々に高度を下げる。

そしてロボットの獣を思わせる爪が三本備えた両足が地面に接触した。

ズウウー……

重い振動音を鳴らし、装甲の付いた膝を曲げて姿勢制御する。そしてワイヤーが切り離されるとゆっくり直立する。他の機体も同様に着陸した。

直立した機体から格納庫に向かって歩行による振動音を響かせながら歩き始め、他の機体も続いた。

格納庫は降り立ったロボットと同様の機体も他にも待機しており、それらを整備する騒音に満ちていた。それぞれの駐機スペースに移動させ、膝を曲げるとそれまで唸り続けた駆動音が収まっていった。



「ふう……」

ヘルメットを脱ぎ、肺に溜まった二酸化炭素を吐き出すように一息。

「第3小隊が帰投した！ 点検作業かかれ！」

「准尉の機体はこれから忙しい、早めに終わらせるぞ！」

格納庫に響き渡る整備隊の叫びを横目で見ながら、報告書に書く内容を考えつつ梯子を降りる。

俺の機龍が忙しいとか、そんな言葉が聞こえたがどういことだろうか。

『第2格納庫に連絡事項です。倉田くらた直哉なおや少尉、神山 勝一ヒトヨシサンマル准尉。16：30に基地司令室まで出頭してください』

格納庫に整備隊の喧騒や装備点検による騒音とは異なる、内壁に設置されたスピーカーから電子音声が反響した。

俺と少尉が呼び出し？

「……取り敢えず行くか」

俺は一介の軍人だ、出頭命令には従う他ない。

格納庫入り口で輸送機から降りて待っていた少尉を見つけ、基地司令室に出頭するべく歩き出した。



基地司令室

「倉田少尉、神山准尉。出頭しました」

他と比べて明らかに重厚なドアを数回、少尉がノックした。

『入れ』

「失礼します」

声の主から許可を得て、ドアを開けた少尉と入室した。

「先の戦闘での結果は聞いているが、一応報告してくれ。口頭で構わない」

「はい、葉山少佐」

司令室の執務机に座る男性——葉山^{はやますすむ}進少佐が少尉に促した。

「鎌倉郊外に出現したギャオスの群れ、30匹近くを撃破しました。なかにはアルビノ型も居ましたが、神山准尉がその注意を引き付けました。」

その間に第3小隊が群れの大多数と交戦して殲滅、准尉も激しい攻防の末に撃破。准尉については第3小隊が把握しています」

「そうか。ご苦労だった。特に神山准尉は19歳で初めてアルビノ型を撃破したようだな、素晴らしい戦果だ」

「はっ、ありがとうございます」

葉山少佐から褒められたので敬礼しながら応えた。

「武勲華々しい君や第3小隊には褒美の休暇でも与えたいところだが……いや、これもお前達にとつては休暇みたいなものか」

「? どういうことでしょうか?」

今の言葉で気になった部分があったのか(もちろん俺もだが)、少尉が葉山少佐に訊いた。

「上層部から辞令が下った。倉田 直哉少尉、神山勝一准尉。お前達二人はこれからアカデミーに転属してもらう」

「アカデミー? EDF唯一の士官学校ですか」

「そうだ。二人には教官として着任することになっている」

アカデミーに転属? しかも教官として、と言うのはどう言うことだ。疑問をこのままに出来そうもないため、俺は挙手した。

「……質問を許可願います」

「質問を許可する」

葉山少佐は俺の反応を予想していたのか、冷静に対応してくる。

「ありがとうございます。ではひとつ、倉田少尉が教官に任命されるのは分かります、ですが。何故、自分を教官に？」

「予てより俺も含めて、EDF高官の何名かで計画していた。

アカデミーは高校卒業が確定した男女が世界中から集まる。お前が19歳になり実戦で戦果を挙げたなら、士官候補生と教官を兼任する形で着任できるよう総司令部に申請していた」

「では、自分は士官候補生であり教官でもある立場としてアカデミーに？」

「その通りだ。既に何度も実戦を経験し、19歳の若さでアルビノ型を撃破した実績は教官として充分箔が付くだろう」

「だから同年代に教官面しても良いと？」

「乱暴に言えばそうなるな」

俺の言葉はどれも予想の範疇だったのか、最後の上官に対して無礼と言える発言すら流して答える。それでも、俺の今までの立場を考えれば納得はいかなかった。

「自分は超能力者です。今の風潮を考えれば、自分が教鞭を取ることは必ず問題は生じます」

「それはあちらが助けてくれる。その上で、お前に乗り越えてもらいたい」
俺が意見を重ねても葉山少佐の姿勢は変わらない。

「……転属の辞令、拜命致しました。命令なら従います」

「それでいい。直ぐに支度して、出発してほしい。先方は明後日には着任してもらいたいようだからな」

「了解しました。葉山少佐、今までお世話になりました」

今思えば、俺は葉山少佐に恩がある。超能力者として、四年前に国連の保護下に置かれた数ヶ月。それからEDFに入って八王子で訓練した3年間は、少年兵ながら葉山少佐が面倒を見てくれたお陰で高校レベルの教養は身に付けていた。

もしかしたら、以前から計画の一環としてそこまで手厚い待遇をしてきていたのか？

「礼には及ばない。大人として俺からしてやれるのはこれで精一杯だからな。尤も、お前くらいの年頃には子供扱いされたくないだろうがな」

「いえ、それでも有り難いです。この恩は忘れません」

「そう言ってくれて嬉しいよ。もう下がっていい。向こうでも達者でな」
今まで育ててくれた上官と敬礼をかわし、少尉と司令室を後にした。



「行つたか……。さて」

先程までいた二人が退室したのを確認した葉山は、執務机に設置された受話器をとり、番号を入力して待った。

「……………八王子基地の葉山少佐だ。そちらに二人を向かわせた。

……………ああ、夜には着くだろう。九式で直接アプローチするから滑走路は空けといてくれ。

……………アイツを転属させたことなら気にするな、今は束の間の学生生活を送らせたい。

……………ああ、そうだな。准尉、いや。神山少尉を頼んだぞ、家城。ではまたな」

こことは違う場所にいる相手との通話を終え、受話器を置いた。そして溜め息を一つ吐いて、執務机に置かれた書類の一つを閲覧した。

その書類は勝一と倉田に関係する書類だが、内容は要約すると以下の通りだった。

『新品川EDF国際総合士官学校の第6期生編入に合わせて、以下の2名を配属するものとする。』

倉田 直也少尉は第2教育大隊の機龍支援科の教官、神山 勝一准尉は少尉に昇格とし機龍科の教官に任命する』

（世の中も変わったものだ。いくら常人とは違う能力を持つとはいえ、軍の正規兵に起用して、ついには教官だ）

内心でそう思いながら、もう一息吐いてから書類の確認を終わらせ、承認の判子を押しした。

第1話 着任

新品川国際特区

東京は、かつて度重なる怪獣の襲撃に遭った。その中でも特に被害を受け続けたのは、かつて東京二十三区の一つだった品川区である。

理由は2003年と2004年に起こった4頭目のゴジラ上陸だった。

水際での上陸阻止に失敗した両防衛戦は、前年で既にかんりの部分が更地と化し、後の戦いでも主戦場に使われた。その時点で防衛予算に圧迫された経済事情から、復興は覚束なくなっていたのだ。

そこで国連は政府と協議した。内容は国際社会による援助。

具体的には品川区在住の市民に対する救済措置。

国連による品川区の管理と新たな都市開発の主導。

そして計画されていた国際軍事組織“Earth Defense Force”
和訳で地球防衛軍、通称EDFの士官学校の誘致についてだった。

近年、世界はゴジラとは異なる脅威“ギャオス”の猛威に晒されていた。

2頭目のゴジラが死滅して漏れでた放射能を同類が吸収、3頭目のゴジラが誕生した

1995年。

同じ年にギャオス、それに合わせるようにガメラが出現。姫神島、福岡、富士、東京を二者が暴れまわり、最終的にガメラがギャオスを殲滅した。

本場の脅威はそこからだった。1997年には宇宙より飛来したレギオンの2度目の侵攻を受けて仙台が消滅。

2年後には世界各地に卵でもあったのか、1999年に同時多発的に出現したギャオスが人類の空路を脅かし、小規模の集落を襲撃するようになったのだ。

この年は4頭目のゴジラの上陸で存在が確認された事もあり、当時は混乱が生じていた。

更には数が定かでない夥しいギャオスの群れを陸海空自衛隊、在日米軍の総力で迎え撃った。

幸いタイミングよく地球に帰還したモスラ、復活したバトラの連携と自衛隊が対怪獣戦における戦術を駆使して撃退に成功した。

この時を境に、人類は共通の認識を得た。国連は二つの組織を再編し、規模を拡大することで意見が一致した。

2004年に国連G対策センターを国連特災（特殊生物災害）対策センター、その翌年にGフォースを地球防衛軍通称EDFとして発足。それぞれ本部を筑波に

設置した。

国連が政府と協議して品川区を管理下に置いたのは、世界で唯一と言えるEDFの士官学校、それを支援する都市にするためだった。

同時に元々品川区で暮らしてきた住民には任意で移住する選択肢を提示し、移住するなら住まいなどを提供するとした。

それに対し品川区の元住民は殆どがそれを受け入れ、また拒否した一部の住民は政府が補償する事になった。

そこからは都市再建がスタートした。

各先進国の建設企業や各国による支援、そして幾度も怪獣の破壊に遭ったことで積み上げられた日本の復興ノウハウは、怒濤の勢いで建設を進行させた。

建設を開始した2006年から7年経った現在では全体の70%が完成、残すは日本領内の離れた都市や海外と空路で繋がる空港を残すのみだった。



2013年 4月7日 PM 19:30

日没後の闇に包まれた東京上空を巨大な影が飛翔する。

ジェット戦闘機特有の大きき裂く鋭い轟音が撒き散らされ、ある地点を目指して

旋回する機体。それを追うように戦闘機に似たシルエットが続いた。

2機が目指すのは進入灯で彩られた滑走路。アプローチのため後者が着陸コースを取るが、前者の機体は滑走路の横に建てられた格納庫前目掛けて飛行する。

「例の機龍が来たぞ！ 整備隊は点検に備えろ」

格納庫前では何人かの整備士が待機していた。入り口付近の誘導灯に照らされた機体——九式機龍A型が背部の戦闘機を連想させるバックユニットのターボファンエンジンを停止させ、脚部のスラストから排気熱を吐き出してゆっくり降下していく。

その直後に滑走路で後者——AC—4 おおとりが着陸すると、九式機龍A型が着地するのはほぼ同時だった。



総司令部から辞令が下った事を葉山少佐から聞いた俺と少尉は、九式機龍でアカデミー——新品川EDF国際総合士官学校に移動した。

今はここの事務科の男性候補生、第2教育大隊の第5期生の案内で主任教官室前に来ていた。

ちなみにここは6年前に第1期生を迎えているため、それから数えて彼は5期目の先

輩、俺は1年経って編入する第6期生だから後輩になる。

目の前の先輩がドアをノックした。

「家城教官。着任予定の士官2名をお連れしました」

『入りなさい』

「失礼します」

部屋の主から許可を貰い、先輩に続いて少尉と俺の順でドアをくぐった。

部屋は思ったより簡素な内装だった。

資料やファイルに纏めた書類を収納する本棚、ある場所にある記念館等一部を覗いて今や珍しい『三式機龍』の模型。あとは部屋の窓際に執務机があるだけで、そこには一人の女性が腰掛けていた。

「EDF日本支部八王子基地所属。倉田 直哉少尉、着任の挨拶に参りました」

「同じく神山 勝一准尉、着任の挨拶に参りました」

「新品川EDF国際総合士官学校の主任教官、家城やしろうあかね茜少佐よ。ギャオス討伐任務の帰投後にすぐこちらへ飛んだそうね、ご苦労だったわ。楽にして」

俺と少尉の挨拶を聞いた女性、家城少佐は執務椅子から立ち上がり労ってくる。

ちなみに家城少佐はグレーを基調としたコートにベルト、黒い手袋といった服装だ。

「ありがとう、金居候補生。下がって良いわよ」

「はっ、失礼しました」

退室を許可された金居先輩が敬礼して部屋から出た。

「改めて、新品川EDF国際総合士官学校にようこそ。こんな時間帯だけど、EDFの学舎まなびやを代表して歓迎します」

「家城少佐、さっそくお聞きしても?」

「何かしら?」

少尉が手を挙げながら聞くと家城少佐は促した。

「感謝致します。まず、自分達のここで担う役割はなんでしよう?」

自分と准尉は今までコンビで任務に当たってきました。ここに転属しても、機龍隊としてはどうなのですか?」

「その質問に対する答えとしては、貴方達はコンビを解消しないわ。」

「こちらでも経歴を見せてもらったけど、今までバディとして組んでいたようね。歩兵

として活動することを考慮してそうだったんでしようけど、こちらでは機龍に乗って実戦は殆ど無いわ。同時に前線で歩兵としての活動もなし。

そのため、貴方達二人は第2教育大隊第2機龍小隊と支援小隊にそれぞれ教官をしてもらいます」

「緊急の召集を受ける場合はあるの?」

「怪獣による大規模な侵攻があれば可能性はあるわ。ただし、基本的には後方配備になると思う。ただでさえEDFは人手が不足している、前線に送って喪うわけにはいかない。他に質問は?」

淡々と説明する家城少佐の言葉は現在のEDFの実情を表していた。

元々、EDFは各国の正規軍から優秀な兵士を募り、足りない分は民間からスカウトして各方面軍各支部を構成する側面があるからだ。

しかも民間の入隊者は退役軍人だったりフライトが好きで人間だったり、あるいは漁師だったりと様々。それら雑多な職業の人間を鍛える期間もあり、発足当初は手も頭も回らない状況だったらしい。

「以上であります。ありがとうございます」

少尉もその発言からそれを感じ取ったらしく、疑念が一切ない納得した表情で頷い

た。

「それと神山候補生。貴方は明日から少尉です。こちらに下った辞令で昇進したと聞いています」

「……自分ですか」

「機龍科の教官をやるなら少尉が最低ラインよ。それに………貴方の立場を考えれば、階級が少し高い方が調度いいでしょう」

「……………了解しました」

今はそう答えるしかない。俺は与えられた役割をこなすだけだ。

「既に夜更けね。案内役を呼んであるからあとは寮に移って貰います。ただ最後に、これだけははっきりさせておくわ」

そろそろ話を締め括ると思ったが、家城教官は俺に視線を合わせながら言った。

「アカデミーは士官候補生の学舎、過程を受けるのに一般人も超能力者も関係ありません。例え超能力者がここの教官になるとしても、それで生じる困難を乗り越えられるよう

全力でサポートする。

それはアカデミーを代表して、EDF日本支部少佐、家城 茜の名において保証するわ」

家城 茜。

EDF日本支部がまだ特生自衛隊だった時代、2003年の品川防衛戦に始まり、その2年後に組織がEDFに吸収されてからはその一員に。

更に4年後の2009年。東京を襲った1000体以上に及ぶギャオスの群れが襲来した第三次ギャオス迎撃戦では、当時開発中だった新兵器『第2世代型MFS——形式番号M^{九式多目的戦闘システム}F S——09』通称九式機龍の試作1号機を駆り、多数を撃破して勝利に導いた英雄。それが目の前の女性だった。

当時の災害の渦中には俺もいた。まだ俺は中学生で、休日を自宅で過ごしてたらいきなり警報が鳴って幼なじみの少女と避難した。

俺が自分の能力を世間に晒したのはそれからすぐだった。銃撃と爆音鳴り響く危険地帯で逃げ遅れた俺と彼女はギャオスに捕捉され絶体絶命だった。その窮地を脱するにはそれまで秘匿していた能力で、差し迫る脅威だったギャオスを撃破するしかない。

斯くしてそれは成し遂げられた。だが同時にEDF経由で俺の存在は国連に見付かり、その日のうちに身柄を確保された。

それまで一緒だった彼女とは当然だが離ればなれだ。彼女は超能力者ではないし、軍人になるのに適切な年齢でもない。

そんな俺がEDFに入って機龍隊に志願したのは、目の前の家城教官が切っ掛けであるのは間違いなかった。

4年前の避難する途中で俺は見た。群れで迫るギャオスを、鋼鉄の銀龍を手足のよう
に動かして殲滅する光景。当時の俺が機龍隊を志すのはそれで十分過ぎた。

「……………そこまでして頂けるなら不満は一切ありません。ご期待に添えるよう全力で
職責を全うします」

だからこそ、家城教官の宣言に俺は敬礼で応える。横では少尉——倉田先任少尉が倣
うように敬礼してるのが気配で分かった。

「では退室なさい。明日から他の第6期生が編入するから、早めに寝ておくように」
「はっ、夜分遅くに失礼しました」

それからすぐ、タイミングよく第5期生の先輩が案内に現れてそのまま退室。

先導されて入ったのは3階建ての職員寮だった。そこからは待っていた寮長の案内
で倉田少尉と同じ部屋に入り、運び込まれた荷物を解くのは明日にして、部屋に据え置

きのベッドを整えてから就寝した。

第2話 第6期生

唐突な転属の辞令、俺と倉田少尉を出迎えた家城教官との対面から翌朝。

八王子基地の頃から叩き込まれた習慣により05:00時、倉田少尉とほぼ同時に起床し、制服に着替える。

EDFの下士官と尉官は黒を基調としたコートにベルト、赤い腕章がセットの制服を屋内、あるいは平時で着用することが義務付けられている。身嗜みを整え、それに着替えるまでが俺の今まで繰り返してきた起床後の過ごし方だった。

「今日は俺以外の第6期生が来るんだよな」

昨夜家城教官から告げられた通りならその内の何人かは俺が担当する候補生で、同時に同じ過程を経験する同期のはずだ。

「よし、行こうぜ。マルハチサンマル08:30には第6期生の入学式だからな。急いで飯食って寮を出ないと」

倉田少尉が促してくる。部屋には事務処理に使うパソコンが置いてあり、少尉が言っ

た通り第6回入学式があるため、教官枠で参加する旨の通知が届いていた。

ちなみに職員寮もだが、第1〜第2教育大隊それぞれに割り当てられた二つの学生寮などは食堂を備えており、国籍を問わず調理する人材が配置されているらしい。世界中から教官と候補生が集まるので当然と言えば当然かもしれない。

「そうですね、行きましょう」

「別に階級は同じだしタメで良いぞ?」

「先任は貴方ですから」

「相変わらず硬えのな。まあいいや」

諦めたように溜め息をつく元上官。時間も惜しいのでさつきと動くか。



08:25

あれから職員寮の食堂で朝食を済ませ、俺と倉田少尉はアカデミー内に建設された多目的大型ホールの構内で待機していた。

建物は外観、内装共に一般の講堂と大差がないようだ。同じ場所では第1、第2教育大隊の主だった教官数十名、そして今年入学する第6期生がそれぞれの指定された席に

着いていた。

その中に、俺はある人物が居ることに気付いた。気付いてしまった。

(何故だ……!?)

特徴的な栗色の長髪をした女性だった。彼女は記憶にある人物と顔立ちも酷似していて、この目で見ても未だ半信半疑の俺は視線を離せない。

(……!?)

だからだろう。俺からの視線を感じたのかこちらに向いて、視線が合うと目を丸くした。

俺は反射的に視線をずらす、彼女の姿を認識してから一つの疑問が脳裏に過った。

(何故彼女が、アヤがここにいるんだ——!?)

四年前、国連に身柄を確保されて以来離別していた、幼なじみだった小林こばやし 彩音あやねがそこにいた。



09:30

衝撃的になかつて親しかった幼なじみとの再会があった入学式典から1時間後、俺は先

任の教官達と共に第2教育棟、第2ミーティングルームで第6期生達を出迎えていた。

内部は候補生用の座席が半播り鉢状を描いて配置されており、俺は教官として壇上の後方に控えている。

第6期生のなかにアヤ——小林候補生がいるのは予想外だったが、今の俺は候補生以前にEDFの兵士であり教官だ。私情のみで動くわけにもいかない

「全員、注目！」

壇上の家城少佐が号令を発し、それを聞いた候補生達の視線が集中してきた。

「みんな集まってるようだし、自己紹介させてもらうわ。私は家城 茜、階級は少佐。

ここ、新品川EDF国際士官学校、通称アカデミーの第2教育大隊で機龍科の教官、二個教育大隊の主任教官を兼任させてもらいます。

貴方達はこれから2年間、私達教官の指導のもと訓練と知識習得の日々を送るようになるけど、不安に思うことはないわ」

自己紹介してから俺を含む第6期生のこれからについて告げた。

「時間ももつたないし私から自己紹介は以上でおしまい。次は他の教官に自己紹介し

てもらおうわね」

家城少佐が号令を発すると陸軍、海軍、空軍に対応した十コースある兵科の教官達が自己紹介していく。

「機龍支援科の教官として着任した倉田 直哉だ。階級は少尉で九式機龍の整備とおおりのパイロットをしてる。同じ機龍支援科なら俺と同じくらいの作業量を求められるが、気楽にいこう。よろしくな？」

倉田少尉はフレンドリーな挨拶だった。まあ、普段から行動を共にしていたので予想通りだった。

次は俺の番だ。

「機龍科の教官として着任した神山 勝一だ。階級は少尉だが、俺は……先日まで日本支部に所属した超能力者だ」

最初に言っておくべき事だけ、前置きとして言っておく。それに対する同期達の反応は、全員ではないだろうが露骨なまでの嫌悪を含んだ視線だった。それを気にせず話を続ける。

「驚いたかもしれないが、話を最後まで聞いてほしい」

そう言つて頼むと、視線自体はあまり変わらないが同期達は聞く姿勢に入つてくれた。

「ありがとう。それで話の続きだが、俺はあくまで機龍科の教官であり、士官候補生でもある。俺が教官として受け持つのは第2教育大隊第2機龍小隊のみで、あとは候補生という扱いになっている。

……それを踏まえた上ではつきりさせておく。俺が超能力者だからと、何か言いたいことがあるなら直接言いに来い。陰でこそこそするのは卑怯ものがすることだ。意見したいことがあるならいつでも話そう。

俺からは以上だ」

言いたいことだけ言つて下がる。少々長い自己紹介だったが、今までの体験したことと思えば、最後にあれだけは言つておきたかった。

一方で同期達を見てみると、その反応は様々に分かれていた。今言つた発言で隣の候補生と顔を見合わせる者、何かを考えるように無言で俯いてる者、ヒソヒソと何か呟いてる者もいた。

それでは進まないため室内にいる教官の何人かから注意が飛び、やがて静かになつ

た。

「……………今の神山候補生が言ったことについては、今後各自で考えてくれると嬉しいわ。続いて次の教官の方、自己紹介をどうぞ」

俺の自己紹介による同期達の様子を見た家城少佐は、そうやってフオローを入れてくれた。昨夜の宣言は嘘ではなかったらしい。

そうした緊張感で教官勢による自己紹介は終わり、第6期生と担当の教官達はここで解散となった。



10:02

約20分で終わった第6期生に対する教官の自己紹介が終わったあと、俺はある区画に足を運んでいた。

何でも、俺と同じ超能力者に割り当てられた隔離区画らしい。と言ってもそこが寝泊まりする宿舎とかでは断じてなく、訓練用の場所とのことだ。

家城少佐曰く、これからお世話になる場所だから見てくるようにとのことだ。そこままで訓練の必要性がある能力じゃないんだが、まあ人生どうなるかわからないしな。

今歩いてる場所は隔離区画の手前から少し進んだ地点で、コンクリートの壁の内側にある通路が続いており、閉鎖的な雰囲気でした。内壁から冷たい空気が肌に伝わってくる。

それは少し歩くとコンクリートの通路を抜け、その先には頑丈そうな金属製の自動ドアを備えた真新しい建物が見えた。だがそこで、背後に気配を感じた。

「ッー」

反射的に前に転がってかわした。急いでさつきまで立っていた場所を見ると土埃が舞っていて、黒いツナギの上に防弾装備を付けた戦闘服姿の少女が立っていた。

「——やはりかわすか。以前より腕をあげたな？ 勝一」

「……藤宮准尉か」

俺が知っている相手だった。俺は国連に超能力者として身柄を確保されてから、サイキックセンターに保護されていた。その時に知り合ったのが目の前の彼女だったが。

「いい加減、挨拶がわりに能力で攻撃するのやめろ。例え受けてもすぐに治るとはいえ、

危ないだろう」

ふじみやしずり
藤宮 静利

さつきも書いた通りサイキックセンターで保護された頃から知り合った少女だが、能力を盤石に使えるようになった頃から今みたいに攻撃してくるようになった。

勿論、彼女からすれば大ケガまではさせるつもりもないらしい。何でも、俺が凌げると分かっているからだそう。俺の能力はそんな万能でもないんだけどな。

「別に構わないだろう。君なら捌けると分かっているのだ、念力テレキネシスなら少しくらい平気だろう？」
爆熱圏ムスベルヘイムを使うわけでもない」

「そういう問題じゃないだろ。それで？ 君が特殊訓練区画の案内役か」

「そうとも。家城少佐に頼まれてな、地下2階から3階までを案内しよう。君も能力訓練で世話になるだろうしな」

「近いうちにそうするよ。案内頼む」

「フツ、了解した」

EDF御用達の黒い士官服についた土を払い、藤宮准尉の先導で中に入った。

第3話 超能力者

人類と怪獣の生存競争が繰り広げられる日本を中心とする世界の歴史において、超能力者の出現は突然だった。

今から6年前、2007年にこれまでになく強力な超能力者を行使する少年少女が確認された。

当時は国連による怪獣がもたらす災害

——特災に対応するため特災対策センター（通称特対）と地球防衛軍（通称EDF）を発足したばかりで、皮肉にも特対は彼らの保護に各方面へ干渉、EDFはその護送が最初の任務になってしまった。

超能力者の問題はそこに留まらなかった。彼らを巡って二つの勢力が誕生したのである。

片や超能力者を怪獣と同列の存在と見なし、排除しようとする排斥団体。

片や怪獣を神聖な存在として崇め、超能力者は『選ばれし子供達』と呼ぶカルト教団を母体とする信奉者団体。

両者は思想の違いから対立は必至で、世界各地でそれぞれが衝突するなど社会問題に発展した。

それだけならまだ良かったのだが、排斥団体にも派閥が存在するらしく、まだ幼い超能力者を拉致、洗脳して少年兵とする事態が発生したのだ。

そう言った超能力者を悪用するケースが確認されてからは、特対とEDFは特災対処の一環で超能力者についての強い権限を有することとなった。

そうした世界規模の混乱が収まって暫くの間、超能力者は特対のサイキックセンターで保護されていたのだが、今から2年前に一人の人物がある計画を推進することで状況は更に動いた。

その人物の名は黒木くろきし翔しょう特務少佐。元陸上自衛隊の幹部自衛官にしてヤングエリートと呼ばれた彼は特殊戦略作戦室の室長だったが、95年のデストロイア戦以降は予算が降りなくなり防衛省で勤務していた。

それから17年後、EDFからスカウトされた彼は渡りに船とばかりに、すっかり埃を被っていたスーパーX3と特殊戦略作戦室ごと日本支部に転属した。

彼が計画を発案したのはその後だった。超能力者の強力な念テレキネシス力や精神感應テレパシー、特定の事象を意図的に発生させる特異能力は重火器に匹敵する武器だと考え、超能力者を戦力として編入するよう総司令部に具申し、受理されると計画責任者として彼らを訓練した

のだ。

当時の俺もその一人だった。国連に保護されてからの2年間、サイキックセンターで過ごしていた俺はある日訪問してきた黒木特佐から説明を受け、迷うことなく志願した。

俺の能力は他の超能力者と違いかなり特殊だが兵士として適性があり、後で受けた九式機龍の操縦システム『Machine Control Link』の適性検査でもランクA（上から二番目の数値）を叩き出したこともあつてEDF陸軍の精鋭部隊『機龍隊』に鳴り物入りの入隊となった。

それから2年経った現在、最初の半年で教育を終えた俺は残り一年と半年間を八王子基地で過ごした後、先日のギャオス討伐戦の際にアルビノタイプを撃破して帰投。葉山少佐から唐突に転属を知らされ今に至る。

その俺が今何をしてるかと言えば。

『勝一つ、いい加減数を増やしても良いんだぞ?! 標的の数がこの程度では練習にならん!』

「できるか! 君の発火能力バイロキネシスは全力でやれば部屋が崩壊しかねない! 地下の広大な空間だからと許可しない! それと俺は君の上官だ、苗字に少尉をつける!」

『細かいこと気にするな！ 爆風なら念 テレキネシス 力の応用で防げる！』

「そういう問題でもない！ 修繕費はただじゃないんだ、弁えろ！」

地下のモニター室で能力訓練中の藤宮准尉に無線で怒鳴り付けていた。

なんでこうなったのかと言えば、あれは今から20分ほど前のことだ。

俺が藤宮准尉とサイキックセンター以来の再会を果たし、特殊訓練区画はメインである地下を案内してもらった。

特殊訓練区画は超能力者が本格的な能力訓練する為に建設された場所で、俺も含む超能力者はここの地下フロアを利用する。

なんで訓練するのに地下なのかと言えば、地上に設けるにしろスペースを確保できないのもあるが、単純に一般の隊員と訓練を一緒に出来ないからだ。

理由は例えば藤宮准尉の発火能力。彼女はそれを応用する得意技に爆熱圏ムスベルヘイムと言うものがあるが、これは広範囲に及ぶ爆発現象を引き起こすものだ。

しかも爆心地があるわけではなく、彼女が認識できる範囲なら何処にでも爆発現象を引き起こせるため、例えばカメラ越しに目標さえ認識できればあとは大体の場所を教えることで攻撃できる。彼女の認識範囲⇨射程距離という大袈裟な図式が成り立ってしまふのだ。

以上の理由から、超能力者の訓練する専用の区画が設けられることとなった。と言うのがここに来るまでに超能力者担当の教官から聞いた話だった。

藤宮准尉が居るのは俺がインカムを付けてオペレーターティンクしているモニター室ではなく、本格的な能力行使を想定して設置された地下訓練場だ。今頃天井で這い回る仮想標的を発火能力などで粉々にしているだろう。

コン、コンッ。

不意に部屋のドアからノックする音が聞こえてきた。

「入ってくれ」

ノックしてきた相手に入室を促した。

「失礼します」

「失礼……します」

入ってきたのは俺と同じEDF下士官用の制服を着た二人の少年少女だった。それぞれ抱えたトレーに湯飲みを載せていて、藤宮准尉と同じ俺の知り合いのようだ。

「鞍馬准尉と川浪准尉じゃないか、久しぶりだな。元気だったか？ あれから背も伸び

たみたいじゃないか」

「はい。神山少尉がサイキックセンターを離れてからはしばらくはそこで過ごしてたんですが、その後何人かここに士官候補生として配属されたんです」

「わたしは、機龍……科。ここでは多分、最年少の超能力……者」

「川浪准尉は機龍科なのか、大したものだな。やっぱり超能力者だから適性を買われたんだな？」

「ん。適性レベルはAだから、鳴り物……入り。神山少尉と、同……じ」

無表情を顔に張り付けながら、言葉の端々で途切れ途切れに話す川浪准尉はどこか自慢げだった。

「そうか。取り敢えずお茶を頂くよ。折角だし藤宮准尉に訓練を切り上げさせ……ッ!?」

言葉が最後まで続かなかった。いきなり強い振動と何かが爆発したような音がしたからだ。

慌てて室内の端末を操作した。すると大型ディスプレイに地下訓練場の様子が写し出される。て、ちよつと待て!

「こちらモニター室！ ガンマワン γ 1、お前またレーヴァテインを使ったのか！」

『レーヴァテインはまだ制御しきれないから練習する必要がある！ 複数の目標を吹き飛ばすのに使った』

「許可した覚えはないぞ！ それに回りを見ろ！ 可燃物に燃え移ってるじゃねえか！」

大型ディスプレイの映像は訓練場のあちこちで燃え盛る標的だった残骸を写していた。標的は可燃物であるため燃焼時に出る煙が吹き出し、室内に充満しようとしていた。

「能力で炎が広がるのを押さえろ！ 俺は職員に知らせる」

インカムを叩き付けるようにしてテーブルに置くと、内線の受話器を取った。



「初日からこんなに疲れるとは……」

藤宮准尉の設備破壊事件から一時間後、俺は職員寮の食堂でテーブルに突っ伏していた。

一応、俺は監督役としてオペレーターティングしていたが、彼女の無茶はここアカデミーこだと日常茶飯事らしく、特殊訓練区画の管理人はお咎め無しにしてくれた。

ちなみに事件を聞き付けた特殊訓練担当者の熊坂教官が来たんだが、正直言つてすごい怖かった。

普段気儘な性格で武人然りと言つた口調の藤宮准尉が何も反論できないくらい威圧感を発していたのだから、彼女がああなら誰も逆らえないだろう。

熊坂教官については色々都市伝説めいた噂も幾つかあつた。

曰く、上空で飛び回るギャオスを撃ち落としした。

曰く、地上に降りたギャオスの喉を握り潰した。

何れも普通なら眉唾物だが、裏付け出来る映像が存在するため嘘とは言い切れない。そう言つた認識が広まっているため、誰もが彼を畏怖しているのだ。

「人間かどうかさえ疑われてるしなあ」「誰が疑われてるって?」ツ!? 熊坂大尉!」
ぼそりと呟くと噂をすればなんとやらで本人が話し掛けてきて驚き、慌てて姿勢を正し敬礼した。

「そう堅くなるな、楽にしてくれ」

答礼しながら苦笑して言った。

「疲れてるところ悪いが、午後もやって貰うことがある。昼飯を済ませたら第2格納庫に言ってくれ」

「そこで何をすれば?」

「お前の受け持つ候補生の小隊や整備科との顔合わせだ。君は機龍科だから特に連携するのはその支援部隊であるが、兵器全般を扱う整備科も重要だ。今後のためにも第一印象から始めてくれ」

第一印象、ね。俺の場合、士官としての意味だけではないんだろうな。

「了解しました。ただその前に、一度部屋に戻ってもよろしいですか?」

「何故だ?」

「自分は昨夜遅くからここに転属しました。その時はベッドメイクだけしてから寝たので、持ってきた荷物はまだ解いてないのです。それを片付けてから向かいたいのですが」

「そう言うことなら構わん。ヒトロックサンマル 16:30までに第2格納庫に入るなら許可する。他に何かあるか?」

良かった。時間は思ったより余裕がありそうだ。持ってきた私物はお気に入りのプラモデルもあるし、それを飾りたいな。

「いえ、ありません」

時間があつて私物を配置することが出来る、俺から文句など無い。有つても目の前の人物に対して口を出せるはずはないが。

「結構だ。それと俺からはもう一つ」

これで終わりかと思えば熊坂教官の話は終わってないようだった。

「お前、超能力者なんだよな？」

「ええ。他の子供達と比べるとかなり違う種類ですが、そうです」
用件は俺の能力らしい。

「二応資料には目を通したが、如何せん要領を得なくてな。それを確かめるためにも、実演してくれないか？」

「実演ですか？ と、申されましてもどちらで？」

「この食堂でいい。ほら、あの隅に観葉植物があるだろ。あれで試してくれ」

指差した方を見ると人気の少ない入り口から向かって左側の隅に置いてあるのが見えた。縞模様の斑が入った長い葉を伸ばした植物、サンセベリアだ。

「熊坂教官。俺にさせたいのはV Oですよね？ まさかあれを成長させるとか言うんでは」

V Oとは俺の能力の略称だ。

Vitality Operation、それが意味するのは生命力操作。長いから略してV Oなんて呼ばれているが、これが俺の能力だ。

能力の概要は以下の三つだ。身体能力フィジカルブースト強化、成長グロースプロモーション促進、エネルギー放射だ。

名称だけ言ってもピンと来ないだろうから順番に説明するが、まずこの能力は現状俺しか使えない。というより、使える能力者は他に確認されていない。

俺は生まれつき^の体質として生命力が強い。それも、異常と言う他無いレベルでだ。そのせい^でか、傷を負ってもすぐに治ってしまう。

4年前のあの時もそうだった。東京を無数のギャオスが襲ったあの日、危機を乗り越えるためやむを得ず使用したのはエネルギー放射。俺の生命力を一度に放出させ、爆発現象を引き起こす攻撃でギャオスの撃破に成功した。それと引き換えに国連に存在を

知られてしまったが、後悔はしていない。

教官の要求について話を戻すが、つまりは俺の生命力をサンセベリアに流して成長させると言うのだ。

「そのまさかだ。俺としても、部下の能力は詳細に把握しておきたいからな。勿論、機龍隊としての実力も今後見せてもらうからな？」

「……分かりました」

尤もな理由だったのでそう応えると、食堂の隅にある植物目掛けて歩み寄る。

近くで見ると配置されてからそれなりに時間が経った植物のようだった。天井に向かって伸びる長い葉は所々が小さく、茶色に変色していた。

……この状態だと「マナ」が読み取りづらいらうな。ただでさえ市販の観葉植物は品種改良されていて、自然物から遠ざかっているから生命力を流しにくいんだが。

と内心で呟きながら目の前の植物に手を触れる。

超能力者が超能力者と呼ばれる所以は一般的には通称通りだが、厳密にはもう一つ理由が存在する。

それは、俺を含む超能力者がマナと呼ばれる、自然界にはごくあり触れたエネルギーを操作する人間だからだ。

超能力には二つの方式が存在する。

ひとつは自分のうちに存在するマナを介し、特定の能力を行使する方式。これは精神感応テレパシーや一念力が該当する。

もうひとつは空気中のマナに干渉し、事象を発生させる方式。これは藤宮准尉の発火能力がそれに当たるが前者とは異なり、空気中のマナに干渉して微小な燃焼物質を加熱、爆発現象を引き起こすのが一連の過程だ。

俺の能力は基本的に前者に当たる。俺の生命力を資本とする能力なので当然だが、生命力で自分の身体能力を強化したり、植物を成長させたり攻撃手段のエネルギー放射は俺みたいに桁外れの生命力があつて成り立っていた。

一方で他の超能力者と違い柔軟性はない。同じ超能力者同士で精神感応を使い、意思の疎通が容易に出来るわけではないし、念力を応用して編み出す防御手段が使えるわけでもない。

寧ろ能力行使する度に生命力を消費するため、常に一定のリスクを伴うから普段は使用を控えていた。

手を触れたサンセベリアに意識を集中、内側にあるマナを直視する。

内包するマナは弱いが無い訳じゃない。これなら生命力を流し込むのには充分だろう。

更に意識を集中する。自分の思い描く事象をイメージすると、淡い^{こが}黄金色の光が溢れて俺の体を包む。

その光の本質はマナだ。それに俺の生命力を乗せて、サンセベリアに流し込むイメージを強くする。

直後、光は螺旋状に回転してサンセベリアを包み込む。

それから起こった変化は劇的だった。徐々に大きくなり始め、更に変色した部分も比例して小さくなっていく。1分と経たないうちにサンセベリアは葉が天井に届いてしまったので、そこで生命力を流すイメージは止めた。

「これがお前の能力、V Oか。こうして見ると凄いなものだ」

いつの間にかすぐ後ろまで熊坂教官が近寄っていた。興味深そうに見上げている。

その後ろでは食堂にいる職員達が注目していて、多くが呆気に取られるか珍しいものでも見るような表情を浮かべていた。

「これが俺の能力でできる内容の一つです。応用すれば負傷した人間の治療も可能だろうとサイキックセンター時代に言われたので、このサンセベリアを見ても検証する価値は有りそうですが」

「怪我人を融通するのは難しいな。負傷兵を実験台にすることの倫理的問題もあるが、リスクが不明だ」

「俺もそう思います。用件は終わったと思います。そろそろ下がっても宜しいでしょうか？」

「構わないぞ。こんなこと頼んですまなかつたな。一旦自室で荷物を整理しに戻るんだつたな。そう言えば食事は摂ったか？」

「これからです」

「そうか。邪魔して悪かった。俺はこれで失礼する」

お互いに敬礼を交わすと、熊坂教官は食堂から退室していった。

……そろそろ食事を摂るか。

天井まで届くほど巨大化したサンセベリアの周りはギャラリィで賑わっていた。人集りを抜けると、食券を販売する券売機に足を向けた。